

加美宏先生を送る辞

われわれの畏敬してやまない加美宏先生が、ついに御退職の時を御迎えになる。一九八三年四月に甲南女子大学から本学に御越し下さって以来、二〇余年の長きにわたって同志社大学のために御尽力下さったことに対して、誠に僭越ながら職場を共にさせていただいたひとりととして、また卒業生のひとりとして心から感謝の気持ちをこめ、御礼の詞を申し上げたい。

折しも、昨年十一月、国文学専攻設立五〇周年・国文学会創立四〇周年の記念の催しが盛会裡に開催され、二〇〇五年四月から国文学専攻は国文学科に昇格することが決まっている。この春は国文学専攻にとって大きな節目にあたる。そのような大切な時期に先生が御退職されることは、われわれにとって誠に淋しいものがある。

先生は常々、私は授業というものを大切にしている、と仰有って来られた。その言葉に、緻密な学問に基く、強い信念に満ちた先生の教育的姿勢をうかがうことができる。教壇に立つ者として、私のような怠惰な者には実に耳の痛い言葉である。講義科目も多い上に、講義以外の煩雑な仕事の多い私学であって、毎日の授業に全力投球することはなかなか難しい。

いうまでもなく先生の御研究は、その御人柄と分かちがたい。周知のように、先生の学問は、軍記文学とりわけ『太平記』の受容史の研究である。思うに、いかなる古典も歴史を離れては存在しえない。歴史的な受容を客観的に記述することによって文学というものを考えるという方法は、安易な文学批評や軽薄な文学観賞に対する根本的な批判であるに違いない。

毎年のことであるが、一月末に卒業論文の口頭試問が行われる。私は研究領域や専門とする時代の近いこともあって、先生の横に並ばせていただき、学生に質問をする機会が多かった。饒舌で粗忽者の私が、あれこれと論の不備や欠点をあげつらうことに窮々とするのに比べて、先生はいつも悠然と構え、おもむろに質問をされることが常であった。それはいつも核心を突いた講評であった。われわれは目のことに目を奪われがちであるが、先生はいつも何が一番重要であるかを考えておられたという気がする。寡黙な加美先生に接すると、無言の教えというものが確かにあったと思う。

大学における研究・教育においても、学会活動においても、また学内外の役職においても、先生が重鎮として常に指導的な役割を果たし

てこられたことは、先生を存じ上げている誰もが感じているところである。先生の警咳に接した者は等しく、先生の学問を通して、さまざまに豊かな財産として受け継ぐことができたことを疑わない。

これから先生が会議やわずらわしい業務から解放され、自由に読書をされたり、存分に調べものや書きものをなさるであろうことを、私などは羨ましく思う。これからもずっと、われわれ後輩と同志社大学を、厳しく叱正し続けていただきたい。そして、先生がいつまでも御健康で御過ごしになることをわれわれ一同、心から御祈りするものである。

廣田
收